

使徒パウロの「変奏曲」

(ピリピ四・一―三)

へぎらきらひかる おそらのほし
よ でおなじみの童謡。だが原曲は「ああお母さん、あなたに申しましょう」というフランスの恋歌だった。一九世紀イギリスに伝えられ、おなじみの Twinkle, Twinkle, Little star の歌詞が付けられ、それが世界中に伝播して最も知られるようになったという。このメロディはまたモーツアルトにも靈感を与え、彼はこの主題に十二の変奏を加えたピアノ曲を世に出した。K. 265、きらきら星変奏曲がそれである。今朝の箇所は使徒パウロの「変奏曲」だ。というのもここにある二つの勧め、即ち「しっかりと立つ」ことと「一つとなる」ことは一・二七において明示されているからである。しかし変奏には主題の素朴さとは異なる味わいがある。手紙の文脈の中にあるより複雑で深い味わいのある、良く知られたパウロの勧めに耳を傾けたい。

一、主にあつて堅く立つこと

パウロはピリピ教会に対して重ねて

主にあつて堅く立つように勧めているのだが、前段を読めば彼が同じ勧めを繰り返す理由が良く解る。一章では反対者たちとだけ書かれていた存在は三章においてはより明確に十字架の敵と語られる。同時に彼らが「十字架の敵」であることはその現世の欲望を重要視する姿勢に見られることが示される。更にある解釈者たちは一九節の「彼らの神は彼らの腹(直訳)、彼らの栄光は彼ら自身の恥」という所をそれぞれユダヤ教の食物規定と割礼を現すとして、この「敵」とは即ちキリスト以上にごうした「目に見える古いもの」にこだわる人々のことを指すとする。こう考えると当時のピリピ教会がいかに世俗主義、律法主義の強烈なプレッシャーの只中にあつたことが良く解つてくる。だからこそパウロはここで彼らに主にあつてしっかりと立つことを念押ししているのだ。もう一つ大切なのは「主にあつて」という言葉である。パウロは自分の足で、自分の努力によつて立つように勧めてはいない。むしろ救い主、イエス・キリストと人格的な交わりを深め、根ざして立つ。その時その人の中にとどまっていますなら、そういう人は多くの実を結びます(ヨハネ一五・五)の通り、厳しい状況の中でも天国人としての歩みを強固にしていけることが出来るという語り、励ましているのだ。

二、一致すること

続いて二節においては一致が語られている。このことは既に一・二七において提示され、二・一―一節によつて具体的な方策とキリストの模範が示されているのだが、この個所でパウロは何とユウオデアとセントケという実名を挙げて一致を勧めている。だがパウロが実名を挙げたのは「晒しあげ」で「デイス(ー)」ためではない。またこの二人の間にあつた不和を愛餐会の片づけを巡るトラブルのようなものと見るのも適切ではない。というのもパウロは彼女らを自身の同労者であり、福音宣教の協力者だと言っているからである(三節)。彼女たちはピリピ教会のリーダーであり、その不和は本質的な問題に起因していたと考えるほうがよいと思われる。時にこうしたリーダーシップの問題がある時は出来るだけオープンにせず、内々に解決しようとするものだ。だがパウロは敢えて実名で呼びかけた。ある学者はむしろそこにこの二人の女性に対するパウロの信頼を見るところが納得である。つまりパウロは「あの二人であれば、きつと真面目から言つてもひねくれたり、逆ギレすることなく受け容れてくれるだろう」と考え、彼女らの名を呼んで霊的な一致を求めたのだ。つまりパウロの求める霊的一致は単なるきれいごとではなかった。そ

れは寧ろ牧会の実践の中から生まれた真実な招きであり、勧めだったのである。

* * *

戦後間もなくのこと。駐留を始めた米軍のクリスチャンたちが G. I. ゴスペル・アワーと言う伝道集会を始めたのだが、そこに陸軍経理学校で学んだ一人の元士官候補生が導かれた。GI達の活き活きとした信仰に魅力を感じた彼は求道をはじめ、主イエスを信じて救われた。その後は K.G.K. の設立に関わったり、自主独立の開拓伝道をして、日本でも有数の聖書信仰を標榜する福音主義の教会を建て上げた。だが彼は長く「聖書信仰以外の立場は異端とは言えないまでも亜流だ」と公言して憚らなかつた。しかしそんな彼に転機が訪れる。ある日彼がヨハネ一七章を読んでいた時、主が弟子たちの一致について二度も言及していることに気付いたのである。それからの彼は自らの聖書信仰・福音主義の旗印を鮮明にしながらも、積極的に他派と関わり、クリスチャンの和解と一致の為に働いて今に至っている。ご存じ尾山令仁牧師である。友よ、福音宣教の為、心を一つにして堅く立つことは同じく私たちの課題でもある。イエスと交わり、信仰に立ち、主にある一致を追い求めよう。